

優秀賞

特別養護老人ホーム

東京都 麹町学園女子高等学校二年 椿まどか

私の母は、特別養護老人ホーム通称「特養ホーム」でヘルパーとして働いていた。だが一ヶ月程前に、事務に異動してしまった。

その理由は、私とした言い合いが原因だった。以前、母がまだヘルパーとして働いていた頃は夜勤も多く、家に居てもすれ違つことが多かった。そんな時私は、学校の事や勉強の事などで色々と悩んでいた。母と話がしたくても、夜勤だったり夜勤明けで疲れて眠っていたりして話す時間が全くなかった。そんな私は、いつか

らか保健室に行きがちになっていた。そんな私を心配した担任の先生が母に電話で私の話をしたそつだ。その日の夜に、母が私に向かって「何で保健室になんて行っているの?」

と言つて来た。私は答えた。「お母さんとは、話をしたくつたつて時間がな

いし、家に居るのに会えないから、だから、どうしたら良いのか分からなくて保健室に

居る。」

と。その後、母は黙ってしまったが、その言

「前に私が居たユニットのお婆さんに手紙が届いているから、一緒に届けに行こう。」

と言つたので、私は母と共に二階のユニットへ行った。そこには、前に母から話を聞いたことのあるお年寄りが居た。皆、不自由な体を一生懸命に使つてスプーンやフォークを持ち、お昼ご飯を食べていた。私はその時、とても強い生命力をまのあたりにした。それだけではない。肝心の手紙を届けたお婆さんは、百歳を越えていたからだ。私は、他の部屋も見せてもらった。そこは、全員個室なのだが、ある一つの部屋に

寝たきりのお爺さんがいた。そのお爺さんは歌うことが大好きで、私が行った時も母の手を握り、「ハイヨーハイヨー」と歌っていた。そんな

お昼になって、母が

なお爺さんに笑顔で話しかけ、一緒に歌っていた母を見た時、正直私は母に言った言葉を後悔した。二階のさつきユニットには二十代のヘルパーさんが多かった。なのに母は皆になじみ、頼られていたからだ。私はそんな母が少しほこらしかった。それに、私は母が、あんなに楽しそうに仕事をしている姿を初めて見た。私は、母からヘルパーという大好きな仕事を取り上げてしまったということにショックを隠せなかった。私が母に、「話したくても、話す時間がない」などと言っていないければ、きつと今も、母はヘルパーという仕事を楽しそうに続けていたに違いない。

そして、ユニットの人が母に

った。

その日は、ちょうど午後五時くらいに震度五弱を観測した大きな地震が来た日でもあった。エレベーターは止まり、祭りが始まってても利用者さんの姿は少なかった。なぜならば、男性職員の方々が、おぶるなどして二階や一階から利用者さんを一階の外まで連れて来ていたからである。でも二階の百歳を越えるお婆さんは一度ろつ骨を折ってしまっているため動かすことが出来ず、お祭りに参加することが出来なかった。他にも寝たきりの人達も移動が出来ず家族の方から苦情が出ていた。

でも、私はお爺さんやお婆さんの祭りを楽しんでいた時の笑顔を忘れることにはないだろう。

「椿さんまたさつきユニットに戻って来て下さいよ。」

と言われていた時、私は母にボソッと

「そんな楽しそうに仕事してるんなら、またヘルパーやればいいじゃん。いつもは私に、やりたい事があるなら最後まであきらめなくなるって言うてるんだよ？私、もう大丈夫だから、ヘルパーやりなよ。」

と言ってしまった。だが母は、

「もちろん、ヘルパーは楽しやないけれど楽しい。でも、また話す時間なくなっちゃうから。」

と言われてしまった。その時、私は母がどんなに自分のことを思ってくれているかを思い知った。

今年の夏は、生きることの大変さ、大切さ、人間の生命力の強さを実感出来た良い夏休みだった。

